

■アニメの居場所が広がった作品

二通：映画『この世界の片隅に』は、キネマ旬報日本映画ベスト・テン第1位など映画賞を総なめにし、観客動員も200万人を超えようとしています。今後、劇場からホールへという草の根的な上映へと移行するわけですが、北海道でもすでに20カ所ほどで上映することになっています。今回のヒットは、異例、奇跡、なども評されていますが、このような反響にどのような感想をおもちでしょうか。

片渕：アニメーションは、観客層、世代層にある種の枠組みがあったと思います。映画を作って公開するには、あらかじめどんなお客さんに観てもらえるかという予想ができていないといけないのですが、本作の特徴は、ターゲットをこれまでのアニメ作品の主な観客層の外側に多くの部分を設定したことになりました。お客さんに届く道筋さえつくりあげることができれば、必ず観にきてくれる。ただ道筋をつくるのが難しい。おそらく何本も作品を送り出さなければ世の中に浸透しないようなことを、この一作でこれほど大きな結果を得たのは予想外でした。

二通：本作のクオリティの高さが口「ミヤSNS」、メディアなどで予想を超えてどんどん拡散していったというですね。

片渕：SNSなどではある程度広がるだろうと思っていたのですが、SNSを使っている世代は限定的です。そのなかでアニメーションをよく観る方々というのはもっと限られます。今回は、SNSを使わない方々にまで広がっていくことができたのが予想外でした。SNSは前作の『マイマイ新子と千年の魔法』²⁾でも活用し、「今日はここの劇場で上映があ



©この史代・双葉社／『この世界の片隅に』製作委員会
原作：この史代『この世界の片隅に』（双葉社刊）
監督・脚本：片渕須直
声の出演：のん 細谷佳正
全国にて大ヒットロングラン上映中！

るので、来てくださいませんか」と流せば、座席がその時点で埋まるということはありません。でも、SNSを使わない生活をしている年齢の高い世代やお子さん連れなど、そういう層にも広がっていったらアニメーションの居場所がもっと広がると思ってもいいました。今回はそこへ手が届きました。

■リアルを追求した

二通：私は札幌のシネコンで正対した後、車で3時間半かけて日高の浦河大黒座でも観たのですが、たしかに小さいお子さんを連れたいご夫婦などが来ていました。昭和30年代の映画館を彷彿させる光景でした。さて、本作はなぜ多くの観客を呼び込むことになったのか。その背景には、学術的ともいえるほどの厳密な調査によってこの時代をリアルに構成している点にあると思います。もんべや配給制度の詳細、食生

どりの弾煙だったとわかるのです。同じ資料には、アメリカ側の空襲で来た搭乗員の取材もあり、それからわかります。

問題は、それがどういう色だったのかというところで、こちらでさらにいろいろ調べたなか、進駐軍が戦後に日本の軍事技術について調査した資料がありました。そこに色素の種類とそれが6色あったことが書かれています。昔のことを調べるとなると、体験された方々に話を聞いたり、書き残したものに触れたりすることが多いのですが、それらは情報がまちまちです。体験談では、紫や焦げ茶などのいろんな色が入っているのですが、実際にはそれらの色は6色の中にはないのです。こうして、当時の体験者の言葉と残されている資料との照合を大切にしてきました。それによって、当時のことを雰囲気として知るだけではなく、本当にこうだったという確証を得ることができました。

二通：このようにリアルを追求しながらも、なぜか冒頭に、1968（昭和43）年のフオークスタンダードナンバー『悲しくてやりきれない』をもってきています。これは、まさに凶星。1951（昭和26）年生まれの私に限らず、多くの観客のハートをつかんだはず。私の場合は、斜に構えていた姿勢が真つぐぐになりました。リアルな世界に『悲しくてやりきれない』をもちこんできた意図はなんだったのでしょうか。片渕：コトリンゴさんが編曲して歌っているものですが、まずやわらかな歌声の雰囲気は合っていました。『悲しくてやりきれない』と言いながら必ずしも悲しそうに歌っていません。歌詞は、心の中にいろんなわだかまを抱えているのですが、地に足をつけて空を見上げ、空を眺めている人の話なのです。ア

ニメーションでは、空を飛ぶ人が主人公になることが多いのですが、本作では地面に足をつけて、むしろ空から落ちてくるものに対峙するような人が主人公です。その意味でも、『この世界の片隅に』にぴったりだと思いました。

■すずさんを通して描いたもの

二通：主人公すずさんの人物像は実に興味深いですね。ほっとしていると自認しており、天然キャラです。自分の嫁ぎ先の苗字を覚えておらず、住所の把握も結婚後しばらくしてからです。街に出れば迷子になります。その一方、なにかに集中すると、それについてはしっかりとやる。特に調理ですね。すずさんは、私のみたところ（不注意優勢）という障害要因を抱えています。芸術的な感性に優れています。すずさんのような人物を主人公に据える現代的な意味についてお聞かせください。

片渕：すずさんは、絵を描いたり、それに物語を付け加えたりする才能が確実にある人ですが、それを社会的な要因で封じられています。なおかつ、封じられた彼女は家事を営む主婦として仮の居場所を見つけています。ところが、才能と家事の両方をつかさどっていた右手を失ってしまいます。彼女は自己実現への道を二重に奪われてしまったのです。それでも、また別の自己実現の目標が現れてくる、それゆえ、人生には意味がある、と語れたことが大切だったと思います。

ほくらはえてして、今いる場所でないかを実現しよう、そうすればなにかになれると思うけれども、現実には満たされなかったことの方が多い。でも満たされなかったからといってそこで自分が終わってしまうわけではない。その先にもさらに別のものではあるかもしれ

【特別インタビュー】 『この世界の片隅に』 で描いたもの

片渕須直さん

かたぶち すなお／アニメーション映画監督。1960年生まれ。日大芸術学部映画学科在学中に宮崎駿監督作品『名探偵ホームズ』の脚本・演出助手を担当。『魔女の宅急便』では演出補を務めた。監督作に『名犬ラッシュー』、『アリーテ姫』、『マイマイ新子と千年の魔法』、NHK復興支援ソング『花は咲く』短編アニメーションなど。



3) ザ・フォーク・クルセダーズの『悲しくてやりきれない』は、メンバーの加藤和彦が、『イムジン河』の発売中止に屈せず、『イムジン河』のメロディを逆回転させて作曲したもの。詞はサトウ・ハチロー。